

法華經・全8章のあらすじ

(032)

第一章「序品」

プロローグとして、法華經が古今に通じ、永遠に変わらぬ真理であることを、劇的な描写で描く。

第二章「方便品」

すべての現象がかかりあつて生ずる理由を、「十如是」で説く。「諸法実相」の道理も示される。

また、釈尊がこの世に生まれてきたいわれは”あらゆる衆生を度うことにある”点が強調される。

前半の中心となる大切な章。

第三章「譬喩品」

「火宅の喩」で、前の二章で示された、総合・統一・止揚の一番思想や、方便こそ真実の教育であることを具体的に示す。

さらに、誰もが仏になれる可能性（仏性）を持つている事実を示唆する。

三界無安・猶如火宅

三界は安きこと無し 猶火宅の如し

衆苦充滿して 甚だ怖畏べし

常に生老 病死の憂患あり
是の如き等の火 熾燃として息まず
如來は已に 三界の火宅を離れて
寂然に閑居し 林野に安処せり

いまこの三界は みなこれわが有なり
その中の衆生は 悉くこれわが子なり
しかも今この処は 諸の患難多く
唯われ一人のみ よく救護をなすなり

第四章「信解品」

めいめいが仏性を持っていることを信じ、理解するのは、実にむずかしい。しかし、この事実を本当に体得すれば、いかにこころ安らかであるかを「長者窮子」の比喩は語る。

第五章「藥草喩品」

仏法の度いの上にあられた差別と平等のかかりあいを示し、自分の持前を本当に生かしていく指示を「藥草の喩」が教える。

第六章「授記品」

誰もが仏性を有するという事実を、須菩提らの四大弟子に、具体的に釈尊が授記（願いと保証）という形で示す。

第七章「化城喩品」けじょうゆほん

授記されても、仏性を自覚する路は、遠くて険しい行程であることを「化城の喩」がさとす。

第八章「五百弟子受記品」ごひゃくでしじゆきほん

私たちは仏性を生まれながらに心中に具えているのであるが、この事実が気がつかなかったり、忘れたりしている愚かさを「衣珠の喩」が暗示する。

第九章「授学・無学人記本」じゆがく・むがくにんきほん

自分は成仏できないと、虚無的人生観に陥っていた小乗教徒に対し、釈尊はみな成仏できると、多くの小乗教徒を記別する。

第十章「法師品」ほつしほん

伝道の方法と、伝道者の心構えを説く。法師とは、仏法を信じ実践する人々の呼称。釈尊は、多くの法師に法華經の公德を説き、「僅かな一句を一念（きわめて短い時間）の間に信じただけでも成仏を得る」とまで言う。

第十一章「見宝塔品」けんほうとうほん

多宝如来（久遠の過去仏の象徴）が、かねての誓願どおり、七宝の塔に乗って大地からセリ上がり、空中に止まるといふド

ラマティックな情景が記述される。

第十二章「堤婆達多品」だいばだつたほん

堤婆は実在の大悪人。そんな彼にも仏性があつて度われると教える。

また八歳の竜宮女子が成仏したとも説かれ、悪人にも、人間でない竜の幼女までもに仏性があることを暗示する。

第十三章「勸持品」かんじほん

釈尊の滅後、法華經伝道者が迫害を受けても、よくそれに耐え忍んで伝導することを誓い、かつそれを勧める章。

第十四章「安樂行品」あんらくぎようほん

法華經伝道者の言動のあり方を「髻珠の喩」で説く。以上で前半（迹門）を終わる。

第十五章「從地涌出品」じゆつじゆつほん

後半（本門）の始まりの章で、無數の大菩薩たちが大地のいたるところから湧き出てきて、釈尊の説法を聞く。

第十六章「如來壽量品」にょらいじゆりやうほん

法華經のピークといわれる章。「医子の喩」で、肉体を持つ歴史上（迹門）の釈尊の本体は、法（真理）を人格化した法身

(本門) の釈尊である旨を明らかにする。

第十七章「分別功德品」ぶんべつとくくほん

先の寿命品を聞いてさとった人たちへ、成仏の証明を与える。

第十八章「随喜功德品」ずいきとくくほん

釈尊滅後の初心における、法華經信者の修行の立場を説く。

第十九章「法師功德品」ほつしきとくくほん

法華經を説く法師の功德を説く。

第二十章「常不輕菩薩品」じょうふきよつぼさつほん

常不輕菩薩が登場し、迫害を受けながらも、誰彼の区別なく礼拝して、「私は、あなた方を軽蔑しない、やがてあなた方は仏となるからだ」と言う。

第二十一章「如来神力品」じょううじしんりきほん

次章とともに、法華經の流通を釈尊が委嘱する。

第二十二章「嘱累品」しゆくるいほん

「見宝塔品」から開かれていた法華經の講座は、この章で終わる。「嘱累」とは、遺産を贈与したり伝授することで、ここでは、法華經の宣布の嘱託を意味する。法華經の主な思想は、

ここで完結し、以下の章は、現実の応用や法華經の功德を展開する。

第二十三章「藥王菩薩本事品」やくおうぼさつほんじほん

法華經思想の実践として、フィクションの藥王菩薩が「未来の衆生の心身の病を治そう」と発願し、身を燃やして仏を供養する。

第二十四章「妙音菩薩品」みょうおんぼさつほん

主役の妙音菩薩が、「嚴のように揺るがぬ不動のこころと、自由自在に他者の身になれる能力」でもって、法華經のこころを宣布する。

第二十五章「觀世音菩薩普門品」かんぜおんぼさつふもんほん

『觀音經』の略称で、一般によく知られている。

第二十六章「陀羅尼品」だうにほん

法華經信者を守る真言が説かれる。「鬼子母」が登場し、人間の子を殺しては食べる惡神だったのが、釈尊にさとされて、子を守る善神に転じる。

第二十七章「妙莊嚴王本事品」みょうしょうごんおうほんじほん

ある国の二人の王子が、異教徒である父王を熱心に説いて、

法華經信者に転向させる経過を述べた章。

第二十八章 「普賢菩薩勸発品」
ふげんぼさつかんほつほん

いよいよ法華經の説法が終わろうとするとき、はるばる東方の国から普賢菩薩が、他の菩薩と連れだつて釈尊を訪ね、「釈尊の滅後は、どのようにしたら法華經の教えが得られるであろうか」と問う。釈尊はこの問いに答え、さらにこの經を受持する者の功德を述べ、法華經を説き終える。

法華經入門 ノン・ブック 松原泰道